SCHEDULE

10日(土)	10:30〜 97min 禁じられた歌声 上映後トーク 池内恵さん(東大先端研・准教授)	13:10〜 132min カナリア 上映後トーク予定 石田法嗣さん(俳優)	16:15〜 76min 裁かるゝジャンヌ 上映前解説 古賀太(日本大学芸術学部映画学科教授)	18:20〜 129min 水の声を聞く 上映後トーク予定 山本政志監督&玄理さん(女優)
11日(日)	10:30〜 120min 神々と男たち	13:00〜 144min セデック・バレ 第一部 太陽旗	16:00〜 132min セデック・バレ 第二部 虹の橋	18:45〜 101min 天草四郎時貞 上映前解説 田島良一(日本大学芸術学部映画学科教授)
12日(月)	10:30〜 87min ジーザス・キャンプ	12:30〜 76min 裁かるゝジャンヌ	14:30〜 142min シークレット・ サンシャイン	17:10〜 169min 大いなる沈黙へ 上映後トーク 橋爪大三郎さん(社会学者)
13日(火)	10:30〜 97min 禁じられた歌声	12:40〜 120min 神々と男たち	15:10〜 126min ノスタルジア 上映前解説 奥野邦利(日本大学芸術学部映画学科教授)	18:30〜 90min ある朝スウプは 上映後トーク 高橋泉監督
14日(水)	10:30〜 169min 大いなる沈黙へ	13:50〜 82min 冬の光	15:50〜 132min カナリア	18:30〜 126min ノスタルジア
15日(木)	10:30〜 101min 天草四郎時貞	12:45〜 129min 水の声を聞く	15:30〜 158min 奇跡の海	18:40〜 114min 神は死んだのか
16日(金)	10:30〜 90min ある朝スウプは	12:30〜 142min シークレット・ サンシャイン	15:10〜 82min 冬の光	17:20〜 158min 奇跡の海

宗教の世界、信仰の世界はどうなっているのか。それを本などから知るには限界がある。映画は、その世界の内部に突き進んでいくことで、人間の信じる力がいかに強いかを白日の下にさらしてくれる。今の世界を知るには、宗教を知ることがどうしても必要なのである。

島田裕巳 宗教学者

宗教の現場は、その場の空気にのみこまれてしまうパワーがあります。この映画祭の作品の中にも、得体の知れないパワーがうずまく宗教が出てきますが、あくまでもスクリーンごしのできごと。観客は絶対的な安全圏から、宗教映画を観賞することができます。映画で観ると、対象物とある程度距離感を保つことができます。そして、その宗教が真実か怪しい系かどうか、真実が見えてきます。

辛酸なめ子 漫画家・コラムニスト

毎回、学生は映画祭のテーマ探しに苦労する。5回目の去年、「マイノリティ」が出た時は、もうこれから先は難しいと思った。しかし、「宗教」が出てきてびっくりした。実は私は9月末まで海外にいたので、学生たちだけで決めたもの。それゆえか、今までで一番深く、強い。

古賀太 日本大学芸術学部映画学科教授

12.10(土)–12.16(金)

ユーロスペース
EUROSPACE

渋谷区円山町1-5 KINOHAUS 3F
TEL: 03-3461-0211
HP: http://www.eurospace.co.jp

前売券:1回券=(一般・学生ともに)¥800/3回券=¥2,100
当日券:1回券=一般¥1,200・学生¥1,000/3回券=¥2,700
各回入替制・整理番号順入場・自由席
開場はそれぞれ上映開始10分前です

※前売券はご鑑賞当日、劇場窓口にて入場整理番号とお引き換えください
※連日10:00よりその日ごとに整理番号の引換/当日券の販売を開始します
※『セデック・バレ』は入替制となっております
　第一部の半券をお見せいただくと、第二部は¥800でご覧いただけます
※やむを得ない事情により作品、上映素材、及び上映時間が変更になる場合がございます
※製作から長い年月を経ている作品は、お見苦しい箇所やお聞き苦しい箇所がございます
※トークショーは変更、中止となる場合がございます

Why do we believe it?

Religion Film Festival

見えないキモチ、願いのカタチ

今年で6回目となる日藝生企画・運営の映画祭。テーマは“宗教を考える”。

映画が生まれた19世紀末には産業革命による合理化が広がり、宗教が次第に力を失ってゆく。それにも関わらず、宗教は現代まで残り続けてきた。それだけ、宗教とは人間の生活に根付いたものであった。

しかし、1995年のオウム真理教の事件を機に、日本人の宗教に対する見方が大きく変わった。この映画祭を企画するメンバーの多くが95年という年に生まれ、その後、2001年にアメリカ同時多発テロ「9・11」が起こり、宗教に対する不信感は増す一方であった。

しかし、これまで長い間、宗教は人々の支えになっていたはずだ。それにも関わらず、我々多くの日本人は宗教に対して無自覚で、信仰を持った人々の言葉を聞いてもなかなか理解できない。

これまで、多くの映画監督が宗教を題材に作品を生み出してきた。カール・Th・ドライヤーの『裁かるゝジャンヌ』では、最後まで自分の信仰を貫く姿が描かれていると思えば、イングマール・ベルイマンの『冬の光』では、自らの信仰に疑問を持つ牧師が主人公である。また、山本政志の『水の声を聞く』では、偽物だったはずの宗教が、次第に本物へと変わっていく姿が描かれている。

我々は彼らの姿を見て、声を聞き、何を感じるだろうか。映画祭を通して“なぜ信じるのか”を理解したい。「信じる」ことは、いつの時代にも必要なことだと思うから。

1928

裁かるゝジャンヌ

監督：カール・Th・ドライヤー
フランス／モノクロ／35mm／76分(東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵作品)

歴史に名を残す殉教者、ジャンヌ・ダルク。その異端審問裁判から火刑までを描く。巨匠ドライヤーは“殉教の聖女”を英雄的な扱いはせず派手な戦闘描写も用いず、実際の裁判記録をもとに“人間”ジャンヌ・ダルクの実像に迫る。公開当時カトリック教会からの圧力によってフィルムが改変され、オリジナル版は長らく見ることができなかった。勇ましい神の使徒ではなく、信仰者の少女としてのジャンヌがこの映画の中には映し出されている。24コマ/秒にて無声上映。

1962

天草四郎時貞

監督：大島渚
日本／モノクロ／35mm／101分

巨匠・大島渚が禁じられたキリスト教徒たちの姿を描く。天草、島原の百姓たちはキリスト教に対する禁制や重税に苦しみ、藩主への不満はもう限界に達していた。救世主として民衆をまとめる若きキリシタン天草四郎は雌伏し、全国のキリシタンたちが一斉発起する時を待っていた。ダイナミックな映像とともに、クライマックスである蜂起の意義と神の意志を問う論争シーンは必見。大島にとって数少ない時代劇映画であり、唯一の東映作品。

1963

冬の光

監督：イングマール・ベルイマン
スウェーデン／モノクロ／Blu-ray／82分

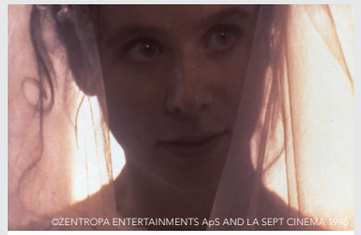
イングマール・ベルイマンが“神の存在”をテーマに描いた「神の沈黙」三部作の第二作。自らの信仰に自信を持てなくなった牧師トーマスは、自分に救いを求めてきた夫婦を救えなかったことに悩み苦しむ。父親が牧師という環境に生まれたベルイマンは、もしも自分が同じ聖職への道を歩んでいたらと仮定してこの作品を作り上げたのではないかと言われており、本作には監督自身の神への疑念や信仰への葛藤が描かれている。

1983

ノスタルジア

監督：アンドレイ・タルコフスキー
イタリア、ソ連／カラー／35mm／126分

主人公の詩人ゴルチャコフは祖国と同化することができず、憧れの南国イタリアを訪れても心の安息は得られない。そして「第三の祖国」ーすなわち魂のふるさとを追い求める彼は、人々に「狂人」と呼ばれるドメニコに出会い、世界を救うための蝋燭の儀式へと導かれてゆく。タルコフスキーがソ連国外で初めて監督した映画であり、中世ルネッサンス期の絵画と現代アートが一体化したような美術は必見。第36回カンヌ国際映画祭創造大賞。



1996

奇跡の海

監督：ラース・フォン・トリアー
デンマーク／カラー／35mm／158分／R-15+

『イディオッツ』(1998)、『ダンサー・イン・ザ・ダーク』(2000)へと続く、困難な状況下でも純粋な心を持ち続ける女性を主人公にした「黄金の心」三部作の第一作。愛する夫を救うため、神の声に従って多数の男性と肉体関係を結んでいくベス。彼女を過酷な行為に駆り立てるのは幻想か、それとも愛の力か。ラース・フォン・トリアーらしい映像美に圧倒される全八章からなる究極の愛の物語。第49回カンヌ国際映画祭で審査委員グランプリを受賞。

2004

ある朝スウプは

監督：高橋泉
日本／カラー／Blu-ray／90分

パニック障害から引きこもった末に新興宗教にハマった男と、そこから呼び戻そうとする女。10月から4月までの7ヶ月間を通して、移り変わる季節と、彼らの関係が変容し、崩壊していくさまを描く。宗教という隔たりを越えて2人の間には愛が存在する。映画監督であり、脚本家としても活躍する高橋泉監督のデビュー作。2004年びあフィルムフェスティバルでのグランプリ＆技術賞受賞を皮切りに、世界各地の映画祭で上映。

2004

カナリア

監督：塩田明彦
日本／カラー／35mm／132分

少年の光一はカルト教団の施設に母と妹と共に数年身を寄せていた。しかし教団が殺人事件を起こし、母は行方不明、妹だけは祖父に引き取られ、光一は児童相談所に保護される。光一は引き裂かれた家族を取り戻すため、少女由希と共に東京へと自らの足で走り出す。その先には少年の運命を大きく揺さぶる結末が待ち受けていた。宗教により「孤児」となった光一の姿が、「人が何かを信じる」とはどういうことなのかを我々に問いかける。

2005

大いなる沈黙へ
グランド・シャルトルーズ修道院

監督：フィリップ・グレーニング
フランス、スイス、ドイツ／カラー／DCP／169分

フランスのアルプス山脈に建つ、俗世間から隔絶されたグランド・シャルトルーズ。世界一厳格だといわれる修道院の内部に初めてカメラが入った。1984年に撮影を申請してから16年後に差し出された条件は、音楽・ナレーション・照明なし、中に入れるのは監督一人のみ。構想から21年をかけて完成した荘厳なドキュメンタリー。一生をただ静謐にストイックに、神に祈りを捧げるという修道士たちの生き方の崇高さに驚かされる。

2006

ジーザス・キャンプ
～アメリカを動かすキリスト教原理主義～

監督：ハイディ・ユーイング、レイチェル・グラディ
アメリカ／カラー／Blu-ray／87分

キリスト教福音宣教会が主催するサマーキャンプを追ったドキュメンタリー。ブッシュ政権下のアメリカ、フィッシャー女史は子どもたちを集めてキャンプを開いた。そこには、神を信じる無垢な子どもたちの姿があった。しかし、女史の教えは次第に暴走していく。これは信仰なのか、それとも洗脳なのか。第79回アカデミー賞ドキュメンタリー映画賞ノミネート。子どもの狂気に満ちた信仰の様子を目の当たりにし、あなたは何を思う？

2007

シークレット・サンシャイン

監督：イ・チャンドン(李滄東)
韓国／カラー／35mm／142分

夫を失い、夫の故郷“密陽（ミリャン）市”で息子と新たな生活を送ることを決意した主人公のシネ。ところがある日、最愛の息子が誘拐され殺害されてしまう。息子を失ったシネは悲しさと自責の念からキリスト教に救いを求める。愛する者を失った時に、人はどのように乗り越えるのだろうか。信仰は人を救ってくれるのだろうか。本作にて第60回カンヌ国際映画祭主演女優賞を受賞したチョン・ドヨンの演技が見る側の心を揺さぶる。

2010

神々と男たち

監督：グザヴィエ・ボーヴォワ
フランス／カラー／35mm／120分

アルジェリアの山奥で、尊敬と慈愛に満ちた静かで平和な日々を過ごすカトリック修道士たち。しかしアルジェリア軍とイスラム原理主義者による内戦は激化し、暴力の波が修道院まで迫る。政府から相次ぐ帰国要請、そしてついに武装集団が彼らを狙い始める。住民を見捨てこの地を去るか、死を覚悟して留まるか。「信念の強さ」と「人間の尊厳」を、宗派や信条に関係なく見る者すべての胸に深く残す作品だ。2010年カンヌ国際映画祭グランプリ。

2011

セデック・バレ

監督：ウェイ・ダーション(魏聖徳)
台湾／カラー／DCP／第一部・太陽旗144分、第二部・虹の橋132分

1930年、日本統治下の台湾で起きた原住民族による抗日蜂起“霧社事件”を、“文化”と“信仰”の衝突という視点から描いた4時間36分に及ぶ歴史超大作。彼らは何故、多大な犠牲を払うと知りながら蜂起に至ったのか。史実に基づく生々しい映像が常識を揺さぶる。監督は長編デビュー作『海角七号/君想う、国境の南』で台湾映画史上歴代1位を記録したウェイ・ダーション。第48回金馬奨では最優秀作品賞を含む最多5部門受賞。

2014

神は死んだのか

監督：ハロルド・クロンク
アメリカ／カラー／Blu-ray／114分

「神は死んだのか」。アメリカの大学で実際に起きた様々な訴訟事件をもとに、無神論者である教授とクリスチャンの新入生との間で繰り広げられる、神の存在をめぐる対立を描いた作品。神を信じる人と信じない人のそれぞれの葛藤を、多様な人物の角度から巧みに映し出す。無神論者であっても、神の存在を全否定することができない。目には見えない大きな存在を前に、人々の心の奥にある捨てることのできない信仰心を見るだろう。

2014

禁じられた歌声

監督：アブデラマン・シサコ
フランス、モーリタニア／カラー／DCP／97分

西アフリカのティンブクトゥ近郊の砂丘地帯で、家族とともにつつましくも幸せな毎日を送っていた少女トヤ。ある日、イスラム過激派のジハーディスト（聖戦戦士）が街を占拠し、住人たちは音楽もタバコもサッカーも禁じられる。一家は混乱を避けてティンブクトゥに避難するが、些細な出来事をきっかけに運命は大きく変わっていく。監督自身がイスラム教徒であり、本作はフィクションだが2012年に実際に起きた事件に触発されている。

2014

水の声を聞く

監督：山本政志
日本／カラー／Blu-ray／129分

山本作品4度目の選出となるベルリン映画祭を始め、国内外で高い評価を受けた衝撃作。ミンジョンは、小遣い稼ぎのつもりで占い師から、いつの間にか宗教団体の教祖となっていた。救済を乞う多くの信者の期待に押しつぶされそうになるミンジョン。偽物だったはずの宗教心は、やがて本物へと変わっていき、大きな祈りに向かっていくのだが…。ベルリン映画祭選出／高崎映画祭最優秀新進女優賞（玄理）／キネマ旬報ベストテン第9位／映画芸術ベストテン第6位